Osaka University Knowledge Archive

Title	大江健三郎初期作品の研究 ： 「学生もの」を中心に
Author(s)	田, 泉
Citation	大阪大学, 2013, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/60057
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【12】

氏　　名	田（デン）　泉（セン）（Tian Quan）
博士の専攻分野の名称	博　士（文学）
学 位 記 番 号	第　２６０５５　号
学位授与年月日	平成25年３月25日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当 文学研究科文化表現論専攻
学 位 論 文 名	**大江健三郎初期作品の研究　―「学生もの」を中心に―**
論文審査委員	（主査） 教　授　出原　隆俊 （副査） 教　授　加藤　洋介　　講　師　合山林太郎

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、大江健三郎作品のうち、初期として認定したものについて、大学生が登場する作品を対象に分析し、その大江作品における存在意義を解明し、引いては近代文学史における意味も見とおそうとしたものである。

「第一章　『奇妙な仕事』論―アルバイト学生を中心に―」では、本作について、学生たちによって犬が殺されることと、それに携わった人間たちが精神的に殺されることが重層的に示される構造だと指摘した上で、全体を経済的利益を求める人間とその生活に対する批判と読む。

「第二章「死者の奢り」論―「奢り」について―」では、従来注目されることのなかった、主たる三人の登場人物の生き方が「曖昧」で存在感が欠如していることで共通しているとし、死者の「奢り」は、それら生きている人間の存在の窮屈さと対照的に示されているとする。

「第三章　『偽証の時』論―「私」を抑圧するもの―」では、これまで集団欺瞞への批判として捉えられてきた本作について、細部に注目することによって、それが本質的なものではなく、均一化する集団の中で違和感や疎外感を抱かざるを得ない女子学生のやりきれない存在のありようを描くものだとする。

「第四章　「見るまえに跳べ」論―「跳ぶ」ことについて―」は、現実を甘く捉えていた青年が悲惨な挫折を経験してはじめて、自分の現実にかかわっていくようになると捉え、末尾で「扉をひらいて外へ出た」「ぼく」は、何度も「跳ぶ」ことができないとされていた存在からようやく脱皮することになると指摘する。

「第五章　『報復する青年』論―報復を放棄するまで―」では、不法監禁された青年が、自分も「あいつら」もこの現実世界から疎外されていると認識することによって、報復する意志が動揺し、自分がずっと観察し続けてきた女の歌をきっかけに現実感を回復するとして、この作品を低く評価してきた従来の説を批判する。

五つの作品の分析を通して、大学生という若い知識人としての知性と人間の生という現実との相克に悩み苦しんでいる姿が描かれており、同時代の学生運動に没頭する学生たちや目的のない犯行をする学生たちが描かれる同時代の他の作品とは明らかに異なる存在を扱っているとして、大江初期作品の意義を提示した。

論文審査の結果の要旨

本論文は、従来あまり取り上げられることがなかった作品も含めて、初期作品のうち＜大学生＞という枠組みに集中して、その存在を統一的に捉えようとする試みは、評価に値する。第一章の経済的な面からのアプローチや、第二章の主人公格以外の人物との共通性の指摘など、地道な分析によって、新しい視点を提示したことも見逃せない。第三章については、女子学生の疎外感を浮かび上がらせることについては一定の成功を収めている。第四章の青年の変化についてもそれなりの後付けがなされ、従来おざなりであった部分への新たな照明が確認される。第五章の女の歌の検討も効果を挙げている側面は否定できない。

寓話性や神話性などの観点から分析されることの多い大江の作品を、人間関係や会話の機微に着目し丹念に読み解いている。これまでの研究史にはなかった読解を提示しようという意欲に満ちていると評価することもできよう。

しかし、第一章の分析については一面的な視点に拘束されて客観性が保てていない憾みがある。第二章では、三者に共通するものの指摘については、「学生もの」の枠組みと外れていることに自覚がない。第四章については、結局最終部をどう読むかに全体の把握がかかわっている割には、その部分の検討が表面的なものにとどまっており、従来の研究を十分に超えているとは言い難い。

＜学生もの＞というくくり方については、たとえば、「青年」などの概念とどう違うのか、より詳細な説明が欲しい。それとかかわって、「学生もの」という枠組みが、たんに学生が登場人物であるということ以上の意味を持って論じられているのかという疑問が払拭できない。さらに、同じ初期作品において、少年を中心的に扱ったものとどのような位置関係にあるのかという視点が欠落している。作中に引用される同時代の評論や文化現象についても、よりきめ細かな理解が欠けていると言わざるを得ない。また、個別の作品論であることを越えるようなテーマや主題性に関する言及に乏しい。論文の完成に十分な余裕がなかったことと容易に推察されると言えよう。

このように、本論文は、より充実したものへと進化することが強く求められていると言えよう。ただし、これらは決定的な欠陥というものではなく、今後の精進も強く期待し、本論文を博士（文学）の学位に認定できるものと判断する。